

ランチオンセミナー2

日時 2019年10月4日(金) 12:00~12:50

場所 第II会場 パシフィコ横浜 501号室

免疫チェックポイント阻害薬 による内分泌障害

座長

赤水 尚史 先生

和歌山県立医科大学 内科学第一講座

演者

有安 宏之 先生

和歌山県立医科大学 内科学第一講座

JACLaS EXPO 2019 展示会のお知らせ

会期 2019年
10月3日(木) 13:00~17:30
10月4日(金) 9:00~17:30
10月5日(土) 9:00~14:00

会場 パシフィコ横浜
東ソーブース番号 No. B4-1

当日の入場手続きが不要になる
JACLaS EXPO 2019
事前参加登録受付中!

事前登録フォームはコチラ

ジャクラス事前登録

検索

<https://jaclas-expo.jp/2019/form.cgi>



期日までに事前参加登録いただいた方には、ネームカードを送付いたします。当日ネームカードをご持参いただければ、受付に並ぶことなく入場できます。

免疫チェックポイント阻害薬 による内分泌障害

座長 赤水 尚史 先生
(和歌山県立医科大学 内科学第一講座)

演者 有安 宏之 先生
(和歌山県立医科大学 内科学第一講座)

生体に備った免疫機構は、細菌やウイルス感染のみならず、癌細胞にも働き、癌細胞を異物として認識し、攻撃・排除する。このシステムは、癌免疫監視機構と呼ばれ、システムの活性化には、T細胞受容体(TCR)でがん抗原を認識することに加えて、もうひとつの補助シグナルが必要とされる。補助シグナルには、アクセルとしての役割を担う共刺激分子とブレーキとしての役割を担う共抑制分子が存在する。免疫チェックポイント分子は、共抑制分子であり、免疫機構が自己に対して不適切かつ過剰に働かないようにブレーキとしての役割を果たしている。癌細胞は、この免疫チェックポイント分子を利用して免疫監視機構から逃れて増殖しており、これを癌細胞の免疫逃避と呼ぶ。

免疫チェックポイント阻害薬は、免疫の抑制性シグナルを遮断することによって、免疫系のブレーキを解除し、癌細胞に対する、T細胞の攻撃性を回復させる薬剤である。我が国では、2014年に抗PD-1抗体のニボルマブが発売されて以降、抗CTLA-4抗体のイピリムマブや抗PD-L1抗体のアテゾリズマブなど、複数の免疫チェックポイント阻害薬が医療現場で利用されるようになった。免疫チェックポイント阻害剤による癌治療によって、多くの患者がその恩恵を受ける一方で、免疫関連有害事象の発生が問題となっている。内分泌関連の免疫関連副作用では、甲状腺機能異常や下垂体機能障害、糖尿病などが発生することが知られている。

甲状腺機能異常は、破壊性甲状腺炎に伴う甲状腺中毒症を呈する症例や、甲状腺機能低下症を呈する症例があり、その頻度は、免疫チェックポイント阻害薬使用患者の約10-20%と高率である。甲状腺機能異常は投与開始の2-6週後と比較的早期に発症することが多い。また、使用される薬剤によって甲状腺異常症の発症頻度に差があり、抗CTLA-4抗体よりも抗PD-1抗体で頻度が高いとされている。昨年認可された抗CTLA-4抗体と抗PD-1抗体の併用療法では、甲状腺機能異常症の発生頻度が増すと報告されている。抗PD-1抗体による甲状腺機能異常の発症予知に関して、薬剤投与前に抗Tg抗体や抗TPO抗体が陽性である場合に、発生率が上昇することが報告されており、事前に甲状腺機能および自己抗体を測定しておくことは有益であると考えられる。下垂体機能低下症は、イピリムマブでの発生頻度が約4%、一方、ニボルマブをはじめとした抗PD-1/PD-L1抗体では、1%未満とされている。発症時期は投与開始6-12週頃に多くみられる。食欲低下・倦怠感など非特異的な症状で発現する事が多く、血算、生化学検査、内分泌機能検査などで診断される。

今回は、免疫チェックポイント阻害剤による内分泌関連の有害事象について、自験例を交えて概説する。

